

## 大川勇著

## 『可能性感覚——中欧におけるもうひとつの精神史』

(A 5 版 480 頁, 松籟社, 2003 年)

相澤正己

熱い本である。この冷えた時代に、異例ともいえる熱さである。

カバーの表紙には、月の地平線に姿をあらわした地球のモノクロ写真が印刷されている。月世界から見た地球という視角は、あきらかに「特性のない男」ウルリヒの視角である。作品のなかで、ウルリヒは「月から帰った」とも書かれているのだから。

本書の熱さは、今や命脈が尽きようとしているユートピア的思惟を何とか救い出そうとし、ポストモダン思潮が陥りがちな「悪しき相対主義」[021]<sup>2)</sup>に何とか抗しようとする、著者の熱い思いによる。「可能性感覚」は、ローベルト・ムージルの未完の大作『特性のない男』(1930/33)のキーワードのひとつである。著者は、ムージルの後輩とっていいインゲボルク・バハマンのエッセイ「特性のない男」(1952)の引用からはじめて、「可能性感覚」を構成する3つの要素を、つぎのように分析する——存在物にたいする偶然性の認識／無限の多様性を保証する多元主義への傾斜／現実の絶対性を解体し、これとは別の現実に向かうユートピア的思惟 [015-016]。

これら3つの要素のうち、最初の2つは、人工生命の研究や現代の宇宙物理学など、最先端の諸科学によっても、今日ではひろく受け入れられるようになってきている。これにたいして、3つ目のユートピア的思惟だけは、逆に消滅しかけている。これを何とかしなければならぬのではないか、というのが、本書における著者の根本的な問題意識である。そして、この問題意識に基づいて、とりわけユートピア的思惟としての「可能性感覚」の展開を精神的に跡づけ、それをさらに未来に向けて救い出そうとする試みがおこなわれる。ムージルの『特性のない男』は、著者の思索が繰り返しそこに立ち返る原点のような役割をしていて、たしかに本書のもっとも中心的なテーマである。しかし、著者も「あとがき」で述べているように、これはけっしてムージル論にとどまるものではない。古代ギリシアからはじまって、現代の最先端科学にまでいたる「可能性感覚」をめぐる思惟の系譜、とりわけユートピア的思惟の系譜を跡づける粘り強い努力、その努力の成果が本書である。

1) この謎の言葉については、つぎの論考を参照されたい。岡田素之「月から帰った男——『特性のない男』論ノート(1)——」, 早稲田大学法学会『人文論集』第39号, 2001年, 25-57頁。

2) 本書からの引用は、[ ]に入れて頁数を示す。

\*

副題に「中欧における」とある。ムージルへの直接的な影響が推測できるというライブニッツ（固有名詞の表記は、著者にしたがう）や、19世紀から20世紀への世紀転換期オーストリアの知的風土が問題にされるという意味で、たしかに「中欧」は重要な位置をしめる。しかし、本書のひろがり、けっして「中欧」にとどまるものではない。間接的な影響ということでは、むしろヨーロッパ全体が視野におさめられるのであり、ヨーロッパのさまざまな精神史的水脈のなかに「可能性感覚」を位置づける努力がなされる。

ライブニッツと聞いても、評者には「モノド」「充足理由の原理」「予定調和」などのキーワードしか頭に浮かんでこない。したがって、ここはただ著者の言説に耳を傾けるほかはない。

たしかに『特性のない男』には、ライブニッツ用語への言及がある。しかし、それは揶揄の対象としてであり、「不充足理由の原理」や「予定不調和」というように裏返しにされて引用されている。ところが、このように一見ライブニッツの思考と鋭く対峙しているかに見える「数学者」ウルリヒには、実は「現代のライブニッツ」[047]として構想された面もあったのではないかと、というのが著者の主張である。

こうして著者は、「ライブニッツのテキストの文学的読解」[081]を試みる。ここでいう「文学的」とは、純粋に哲学的な概念からはこぼれ落ちてしまう何かがライブニッツのテキストにはあり、したがって、「文学的」に受容することで、それを掬いとりとうとする、ということである。あるいはこうも言われる。「ライブニッツの可能世界論には、純粋に哲学的な概念規定をこえて、文学的想像力をつよく喚起する作用がある」[071]と。テキストとしてとりあげられるのは、『形而上学叙説』（1686）、『アルノーとの往復書簡』（1686）、そして『弁神論』（1710）である。

細かな分析については本書を直接繙いていただくとして、著者の結論は、「ライブニッツのオプティミズムは、〈現実＝最善世界〉という表面上の公式の下に、最善世界を未来に求めるユートピア的思惟を内蔵していた」[112]ということになる。現実世界を最善世界とするのは、ライブニッツのオプティミズム（＝最善世界説）の公式的見解にしかすぎない。この公式的見解は、ムージル／ウルリヒにとって揶揄の対象にしかなりえなかった。しかし、著者は、ライブニッツにおける最善世界の「完全性」を、「完成可能性」に読みかえる何人かの研究者の解釈を支持する。そこにひらけてくるのは、ライブニッツ「可能世界論」の公式的見解から隠された深層の部分である。「可能世界論の深層に開けた風景は、生成へと向かう無数の可能的世界というイメージでムージルを魅了した」。つまりは、「ライブニッツの可能世界論はムージルの可能性感覚を生む母胎となったと言ってもいいかもしれない」[081]と。

ムージルのライブニッツ受容は、いわゆる実証はできない、と著者は言う。しかし、ライブニッツの「ユートピア的思惟」がムージルに大きな影響をあたえたという説は、かな

りの説得力をもつものだろう。ライブニッツのオプティミズムの「論理の深層に耳をすませば、現実化されなかった可能的世界のざわめきが、幾重にもかきあって聞こえてくる」[077] という文章は、美しい。

つぎに著者は、ヨーロッパにおけるユートピア文学の系譜を検討しはじめる。まずとりあげられるのは、『弁神論』でライブニッツも言及している、フランスのドニ・ヴェラスの『セヴァランブ物語』(1677-79)である。トマス・モアの『ユートピア』(1516)以来の伝統にのっとり、架空の旅行記を実話として読ませるための仕掛けがなされている。著者によれば、『セヴァランブ物語』の画期的なところは、そこではじめてユートピアの生成が語られたことであった。

ドイツのヨハン・ゴットフリート・シュナーベルの『フェルゼンブルク島』(1731-43)についても、かなり詳しく言及されている。デフォーの『ロビンソン・クルーソー』(1719)以来、数多くのロビンソナーデがつくられたということもあり、実話と信じさせるための仕掛けは、さらに複雑なものになった。しかし、これはかなりの成功をおさめて、この島に移住しようとする人びとが、18世紀には少なからずいたという。『セヴァランブ物語』の方向をさらにおしすすめて、『フェルゼンブルク島』は、ユートピア文学史上はじめて、ユートピアの生成を中心に語る小説となった。未来への展望もあるという意味では、フランスのルイ・セバスチャン・メルシエの『紀元2440年』(1771)のような、最善世界を未来にもとめるユークロニア小説の先駆けともなった、と。

つづいて、「世界の複数性」という観念の系譜がとりあげられる。これもまた、ムージルの可能性感覚に通じる精神的な水脈を探るためである。

おおよそ歴史の流れに沿ってきた叙述が、ここでいきなり逆転させられる。1992年に開始された、米航空宇宙局(NASA)の「コロンブス計画」から話がはじまるのだからである。このSETI「地球外知性体探査」の根底にある問いは、この宇宙には、われわれ地球の人類以外にも知的生命体が存在しているのではないか、というものであった。そして、「世界の複数性」をめぐるこの問いが、いかに人類を熱狂させるものでありつづけてきたか、それが生んだ悲喜劇が、時間を巻き戻すようにしてたどられる。19世紀から20世紀にかけて世界を席卷した、「火星人フィーバー」[154]である。

何人かの天文学者の関与によってはじまった火星人フィーバーは、P・ローエルの疑似科学的著作や、H・G・ウェルズの『宇宙戦争』(1897)によって絶頂に達した。これは、1909年を境に、厳密な科学の手によって沈静化されることになるのだが、この熱狂がけって消失したわけではなかったことを示す事件が、1938年のアメリカで起こった。ラジオドラマ『火星人襲来』が、アメリカ国民にパニックをひき起こしたのである。

第2次世界大戦前夜における、アメリカ人の不安な心理とも関係づけられるこの事件は、「世紀末に頂点を迎えた火星人フィーバーの最後の名残」[161]でもあった。精密科学によるSETIにとっては阻害要因でしかなかった、この熱狂に、著者は世界の複数性にたいする人類の「熱い思い」[162]を読みとる。そして、この「熱い思い」の精神史が、古代ギリシアからたどられることになる。

アナクシマンドロスからエピクロスにいたる多くの哲学者が、世界の複数性を説いた。これにたいして、プラトンとアリストテレスは、世界の単一性を主張した。古代原子論の流れをうけて、世界の複数性の観念は最終的にエピクロスに集約される。そのエピクロスを崇めて、ひとりの古代ローマの詩人が、古代原子論の思想を壮大な哲学叙事詩にうたいあげた。ルクレティウスの『事物の本性について』である。古代ギリシアにおける世界複数説の「雄渾な文学的復原」[171]と評価される。

帝政ローマの時代に、ギリシア語で書いた作家ルキアノスの『本当の話』(170頃)にも言及されている。諧謔とパロディーの精神に満ちあふれた『本当の話』は、「地球以外の世界の住人をえがいた最初の文学作品」[174]であり、フランシス・ゴドウィン『月の男』(1638)からはじまって、現代の映画『ET』(1982)にいたるまで、地球人以外の知的生命体を想像するための準拠枠をあたえつづけた。

このルキアノスとゴドウィンを隔てる、ほぼ1500年にわたる空白が、つぎに問題にされる。これについて、ひとつにはルキアノスの翻訳の問題が指摘されている。しかし、もっと大きい問題は、ヨーロッパにおけるキリスト教による一極支配の確立であった。この唯一神教にとっては、世界の複数性という観念それ自体が認めがたいものであった。ところが、13世紀以降、一部のスコラ学者のあいだに、神の自由と全能を論拠に、むしろ世界の単一性に異議を唱える動きが出てくる。こうして15世紀も半ばにいたって、ニコラウス・クザーヌスが、地球外知性体について自明のことのように泰然と語るということが可能となった。

クザーヌスが枢機卿にまで昇りつめたのにたいし、16世紀に世界の複数性を主張したジョルダナー・ブルーノは異端審問にかけられ、焚刑に処された。この違いを決定づけたものは、コペルニクス『天球回転論』(1543)の出版であった、と分析されている。しかし、教会による支配を批判する声は、しだいに高まっていく。17世紀末には、フランスのフォントネルによる啓蒙書『世界の複数性についての対話』(1686)が、ローマ法王庁によって禁書にされたにもかかわらず、各国語にも翻訳されてひろく読まれるようになった。18世紀に入ると、世界の複数性という観念が危険思想でなくなったわけではないにしても、地球外知性体の存在は、半ば自明のこととして語られるようになる。それを代表する著作として、カントの『天界の一般自然史と理論』(1755)が論じられている。

つぎに扱われるのは、反ユートピアの問題である。ハックスリーの『すばらしい新世界』(1932)やオーウェルの『1984年』(1949)は、20世紀に入りユートピアが実現可能なものになることによって、その本来の2つの意味、「どこにもない場所」として消滅すると同時に、「よい場所」としても消滅することを示している。しかし、同じようにユートピア告発の書と見なされることの多いザミャーチンの『われら』(1920-21)には、むしろユートピア的思惟の再生をもとめる精神がうかがわれる、と著者は言う。

ここで著者は『特性のない男』に立ち返り、そこで展開されたユートピア的思惟を跡づける。ユートピアにとって否定的な時代状況のなかにあつて、「ムージルは、ユートピア幻想の仮面を剥奪しつつ、しかしけって冷笑的態度におちいることなく、いっかんして

ユートピア的思惟の可能性を追求している」[240]と。ここで追求されるのは、狭義のユートピア文学におけるような唯一の完全な社会、ではない。むしろ、前提になっているのは「ユートピアの複数性」[242]であった。

ウルリヒが、「正しい生」を探求すべく構想するユートピアは、たしかに本来は複数である。「精密な生のユートピア」、「エッセイズムのユートピア」、「芸術のような生のユートピア」の可能性が追求される。しかし、問題は、アガーテとの出会いによってそれらが忘れられ、「結局は〈別の状態〉あるいは〈千年王国〉という単一のユートピアへと収束していく」[242]ことだ、と捉えられる。ユートピアがもつ「現実をくつがえすアナーキーな起爆力」[245]は、近親相姦という禁忌を犯す兄妹愛の試みにも受け継がれてはいるのだが、単一のユートピアに収束することによって、その破壊力は失われてしまう。ムージルの絶筆となった、「千年王国」が顕現する「ある夏の日の息吹」の庭は、比類ない文学的達成として絶賛されることが多い。しかし、著者は、この庭の光景は、「静物画」としての「静止した生」あるいは「死せる自然」であり、「絵のなかに閉ざされた永遠の美のユートピア＝死のユートピア」[251]である、と読む。

だからといって、『特性のない男』は、反ユートピア小説になるわけではない。ムージルが「遺言のように」[253]記した「アクティヴィスト」と「ニヒリスト」をめぐる兄妹の対話のなかに、可能性感覚の魅りを告げる新たな展開の可能性を著者は見る。それが、「帰納的志向のユートピア」構想である。

著者はさらに、従来の研究では、『特性のない男』に吸収されたものと解釈されることが多かった『南極の国』／『惑星エト』を、ムージルによる独自のSF小説構想として救い出し、ユートピアの複数性に関わるものとして論じている。そして、ムージルの幻の小説構想を引き継ぐべき人物としてエリーアス・カネッティの名をあげ、その『人間の地方』(1973)をとりあげる。そこに見られるおびただしい異世界断章は、ユートピア的と呼びうる強烈な意志の存在、「現にあるものとは別様の存在可能性をもとめようとする強烈な意志の存在」[283]を感じさせずにはおかない、と。「ムージルから可能性感覚を受け継ぎ、それを〈越境する精神〉へと発展させたカネッティ」には、ムージルの「観念性」にたいして「圧倒的な肉体性」[288]がある、とも言われる。可能性感覚は、元来「弱者」としての周辺人の思考、あるいは感覚であり、ムージルもカネッティも、そういう意味で「中心に位置する者」ではなかった[294]、という指摘も重要である。

つづいて、可能性感覚とオーストリアの知的風土との関係が論じられる。19世紀から20世紀への世紀転換期オーストリアには、印象主義と並んで、もうひとつの精神の系譜があった。それが実証主義の系譜であり、マッハ、フロイト、ケルゼン、ヴィトゲンシュタインといった人びとによって代表された。そして、マッハについて学位論文を書いたムージルも、この系譜につらなる存在ではないか、と著者は見る。1964年に書かれた手紙で、G・ルカーチは、本来対極にあるはずの新実証主義と神秘主義の混合に、ヴィトゲンシュタインの場合と同じく、ムージルの独自性を見、そこにクラークスのようなドイツ非合理主義との隔たりを根拠づけている。クラークスの大きな影響下で構想された「別の状態」が、

ムージルにとって初めからアンビヴァレントなものであり、最終的に否定されるのも、このあたりの事情に関わっていたのではないかと。

これにたいして、「別の状態」のユートピアが破綻したあとの「帰納的志向のユートピア」は、ウィーン大学に新設された「帰納科学の歴史と理論」講座に招聘されたエルンスト・マッハを思いおこさせる。あらゆる形而上学を拒否したマッハによる、ウィーンの強力な実証主義の磁場は、ムージルにも決定的な影響をあたえた。マッハ的思考の影響は、可能性感覚の誕生を告げる作品『愛の完成』(1911)の成立にさいしても無視できない。そして、著者は、ムージルとオーストリアの関係について書かれたヘルマン・ブロッホの言葉を組みかえて、ムージルは、作品のテーマにおいてとくにオーストリア的ではないが、「精神性のあり方、そのときすまされた鋭さ」においてオーストリア的なのだ、と書く。

マッハの思考は、ウィーン印象主義の詩人や作家たちにも影響をあたえた。ヘルマン・バルは、マッハの世界観を「印象主義の哲学」と呼んだが、要素一元論によってすべてを偶然と見るマッハの世界は、ホーフマンスタールやペーア＝ホーフマンにとって戦慄すべきものでもあり、彼らは「印象主義の形而上学」に逃れることになった。

さらに著者は、ムージルのマッハについての学位論文を検討する。これは、「若いウィーン」の詩人たちとは異なるマッハ受容を示し、反マッハの指導教授への配慮からマッハ批判を標榜しながら、その実、かなりの箇所はむしろマッハへの共感をあらわしている。著者によれば、いちばん重要な点は、「現実を虚構と見なす精神の視角」の獲得であり、それゆえにムージルは、「若いウィーン」の詩人たちのように「偶然の必然化」をもとめるのではなく、「偶然を愛する可能性の世界をえがく」作家になりえたのだ、と [337]。

今ではほとんど知られなくなった対象論の哲学者、アレクシウス・マイノングとムージルの関係にも言及される。マイノングの対象論とムージルの可能性感覚は、実在しないものに向けられた幻視的なまなざしという点で、非常に近い関係にある、と。対象論を葬りさったバートランド・ラッセルが、「強靱な現実感覚」[369]を根拠としたことが、そのことを逆に示している。マイノングもオーストリアの哲学者であったが、オーストリア的と呼ぶしかない「精神のあり方」として、「実在性への不信」を指摘する説が紹介されている [370]。オーストリア人は、「現実感覚」の欠如という傾向をもち、それが可能性感覚につながり、マイノングとムージルをむすびつける、と。そして、やはりこの傾向をはっきりと示した戦後オーストリアの詩人がいた。インゲボルク・バッハマンである。

すでに第1章冒頭で、ムージルに関するバッハマンのエッセイが引用されていた。彼女とムージルをむすびつける関係の糸は多いが、著者がとりわけ注目するのは、ユートピア概念の共有である。ただ、ユートピアを信じつづけることにおいて、バッハマンはより純粹であり、それゆえに彼女は『特性のない男』をいわば創造的に誤読した、とも言われる。

最後の第8章は、ユートピアの終焉を告知するK・H・ボーラーの論文(1972)の引用からはじまる。こういった論調に、それなりの説得力があることを認めつつも、著者は反対の立場にたつ。そして、それを、カール・マンハイムの『イデオロギーとユートピア』(1929)に依拠しながら展開していく。要するに、「ユートピア的意識」は「現実を超越する意識」

であり、それが消滅してしまうと、恐るべき即物的世界が生じずにはいない、ということである。ユートピア的意識の消滅は、文化と教養の衰弱にもつながる。ポストモダン的な知の遊戯化が大学の内外で進む一方で、諸学の専門化が、これまで以上に進行している。1980年代には、アメリカの大学でも教養の崩壊がおこり、今のアメリカは無教養な専門家が跋扈するばかりになってしまった。戦後、アメリカ型の教育システムをとり入れた日本も、同じ問題に直面している、と。

マンハイムもまた可能性感覚の系譜につらなる人物であり、「世界の複数性」の観念と、「現実を超越する意識」を共有していた。そして、社会的基盤を階級よりも教養におく知識人に期待したが、それはナチズムに抵抗する拠点にはなりえなかった。ナチを支持した大衆に嫉妬され、憎まれたユダヤ系知識人のひとりであったマンハイムは、イギリスへの亡命を余儀なくされた。

最後に著者が語るののは、ムージルの「カカーニエン」の2つの首都、ウィーンとブダペシュトに通底した知的状況が、いかに実りゆたかなものであったか、である。マンハイムもブダペシュト生まれであった。そしてムージルとマンハイムは、マッハ受容を介して、間接的にむすばれてもいた。また、マンハイムも典型的な周辺人であった。ムージルやカネッティと同じ「弱者」としての周辺人の思考がそこにあった。そして、周辺人の思考こそは、可能性感覚だったのである。

\*

パンドーラーの筐、あるいは壺に、どうしてありとあらゆる禍とともに希望が入っていたのか、と思ったことがある。希望は善いものはずだったのだから。しかし、ひょっとすると、希望こそはもっとも重くまがまがしいものであり、それゆえに最後に残ったのかもしれない。ユートピアの終焉を積極的に肯定する人びとは、希望こそが諸悪の根源だ、と言うだろう。そんなものは捨てて、この現実をあるがままに受け入れよ、と。

20世紀前半の重要な政治家として、ヒトラー、スターリン、チャーチル、ルーズヴェルトをあげるとして、はじめの2人とあとの2人を分けるもののひとつは、ユートピア的思惟の有無、あるいは多寡であろう。ユートピア的思惟によって、はるかに多くの血が流されている。

こうしてみると、ユートピア的思惟としての可能性感覚などは、ない方がいいのだ、ということにもなりかねない。しかし、評者にとって身近な大学を見た場合、本書の著者がいう無教養な専門家、あるいは即物的な技術者というタイプの大学人は確実にふえている。評者は、いわゆる68年世代に属する。あの当時の学生たちの運動は潰え、日本におけるユートピア的思惟の衰退傾向を加速することになるが、学生たちが叫んだ「大学解体」は違う意味で成就した。産学官連携は、今や自明のことであり、競争原理が共通の原理として推奨されている。教養のような計量不可能なものでは競争に勝てない。競争に勝つためには、専門か技術を身につけなければならない。しかし、そういう大学人ばかりになった

とき、大学はどうなるのだろうか。「大学解体」は成就したにしても、何かまだ救い出すことができるものもあるのではないか。本書を読んで、そんなことも考えた。

ホーフマンスタールが、ドイツとオーストリアを比較して、ドイツの鳥は空高く飛翔するが、オーストリアの鳥は、羽毛が見分けられなくなるほど高く飛ぶことはない、と言ったことがある<sup>3)</sup>。ドイツ観念論にたいする、オーストリアのある種の経験論的な風土をいつているのだが、本書でマイノング対象論の息の根をとめたラッセルという話を読んで、イギリス経験論ともまた違うのだ、と思った。ホーフマンスタールの比喻でいえば、イギリスの鳥は飛ばない、ということになるだろうか。オーストリアの鳥の場合、その微妙な中空の飛翔が、実証主義的でありながら奇妙に現実感覚の希薄さを示す、オーストリア的可能性感覚につながっているのだろうか。ラッセルとヴェイトゲンシュタインの訣別も、このあたりと関係しているところがあるかもしれない。いずれにしても、ムージルの「カカーニエン」の、夢と現実が混ざりあったような不思議なありようが関わってのことであるには違いない。21世紀はじめの現代は、アングロサクソン流の「現実主義」が、世界を一極支配しようとしている時代である。そこに、ひとつの「健全さ」があることを評者は認めないわけではない。しかし、息苦しさも否定することはできない。可能性感覚は、その息苦しさからの解放をもたらすだろう。

著者は、一般に終末論は、複数性を排除するためにユートピアとは区別される、とも書いている [275]。『ユートピアの精神』(1918)や『希望の原理』(1954-59)の著者エルンスト・ブロッホへの言及が、意外に少ないという印象も、この問題に関わることだろうか。この複数性とポストモダンの相対主義の関係が、いちばんむつかしいところである。「悪しき相対主義」に陥らないために、「帰納的志向」でひとつひとつ検証していかなければならない、ということであろう。大切なのは、「精神性のあり方」なのだ。

学位論文をもとにして、これだけのものを書きあげた著者に、心から敬意を表したい。評者による本書の跡づけは、多くのことに言及できなかった。本書のひろがりや深きゆえである。著者もまた、一個の〈越境する精神〉であって、その仕事は誰もが真似ることのできるものではない。しかし、現代においてゲルマニストは何をなすべきであり、また、何をなすことができるのか、その「可能性」のひとつを、本書は見事に示している。

---

3) Hofmannsthal, Hugo von: *Österreich im Spiegel seiner Dichtung*. In: *Gesammelte Werke in zehn Einzelbänden*. Hrsg. von Bernd Schoeller. *Reden und Aufsätze II* (1914-1924). Frankfurt am Main 1979, S. 16.